

序

多くの疾患では^{かか}罹ると表現するのに対して、かぜの時だけ「かぜをひく」というのは何故であろうか。

古来よりかぜは「風邪」といわれ、病を起こす「邪」な風であった。「衛気」といわれる体力や免疫力が低下している人は、この風の邪気を引き寄せるといわれていた。そして、背中の上部にある「風門」というツボから、風邪が体内に進入するため、背中がゾクゾクすると説明されていた。

「かぜをひく」というときの「ひく」に相当する漢字は「引」である。この場合、“吸引”や“客引き”に用いられる“中に引き込む”という字義である。つまり、「外にある風の邪気を引き寄せ、自分の体の中に取り込む」といった意味になる。

「かぜをひく」という表現は、病気の他にも日常生活の中で使用される。餅にカビが生えて固くなる、ゴムやタイヤなどが古くなって劣化する、お茶が空気に触れて味が落ちるなどの際に擬人的に「かぜをひく」という表現はよく用いられる。これも「風の邪気」を引き込んで、品質が落ちたと信じられていたためだろう。

かぜだけではなく、風という文字を宛てた疾患は他にもある。「痛風」は外来でよく遭遇する疾患であり、小児の熱性ウイルス疾患である rubella は「風疹」である。「中風」というと脳卒中による片麻痺や言語障害を指す。「風に中^あたった」という意味で、風が麻痺の原因と考えられていたためである。「風毒」とは脚気の、「風痘」とは水痘の別名だそうである。日本人にとって、疾患は悪い風とともに訪れ、風とともに治癒するものだったのかもしれない。

また、「藪医者」の語源も諸説あるが、腕が悪くて普段は患者の来ない医者でも、かぜが流行すると、患者が押し寄せ忙しくなることから、かぜ（風）で動く＝藪医者という説もある。ここにも、かぜが登場している。

さて、レジデントノートで「“かぜ”を読む！」というタイトルで、かぜ診療の特集（2006年1月号）をお手伝いさせていただいて5年が過ぎた。かぜ診療もベーシックなところは変わりようがないが、この数年で新型インフルエンザのパンデミックなど大きく変貌した部分もある。本書は、2006年の特集のフレームワークをもとに、今まさに現場の風の中で活躍されている指導医の先生方に書き下ろしていただいた。サブタイトルにもあるように、最新の「かぜ診療の極意」が満載の一冊である。鯛焼きの宣伝ではないが、頭から尻尾まで「かぜ」がぎっしり詰まっている。鯛焼きを食べるときには、頭から食べるか尻尾から食べるかが話題になるが、結局は正しい食べ方などというものはなく個人の好みというところに落ち着く。本書も同じで、一頁目から読む必要はなく、好きなように読んでいただきたい。日々の外来で、ERで、疑問に思ったり勉強したいと思った項目から開いてもらえればよい。

つまみ食いしやすいように、本書の構成について概説しておく。

第1章「かぜ、って何？」では、かぜの疾患概念や基本的なアプローチについて総論的に解説した。初めて一般外来に出る研修医はまず目を通してほしい。

第2章「かぜの症候診断」においては、多彩なかぜ症状の病態や鑑別疾患についての議論が中心である。かぜ診療において症状が非典型的あるいは重篤など「本当にかぜかな？」という疑問をもったときの大きな助けとなるであろう。

第3章「かぜの治療」には、処方薬のみならず市販薬から漢方薬に至るまですべてのかぜ治療が網羅されている。また、総合感冒薬や対症療法のは是非、永遠の話題である抗生物質を処方すべきかという問題についても論を深めた。

第4章「誰でもかぜをひく」では、小児や妊婦、高齢者におけるかぜ診療の留意点について解説するとともに、かぜ予防についてのエビデンスレビューも含めた。

第5章「各専門科からみたかぜ診療」では、かぜと似て非なる専門的治療を要する疾患の鑑別について臓器別にまとめた。また、基礎疾患があり専門医を受診している症例におけるかぜ診療の留意点にも言及した。

第6章「インフルエンザあれこれ」は、インフルエンザの診断や検査、治療、予防についてのレビューである。流行が始まったら、まず目を通しておきたい。

第7章「患者さんから、こう質問されたら？」を一読いただければ、かぜに関する素朴な疑問に対して返答に窮することは回避できるはずである。

「自分がかぜを診る医者じゃない！」というプライドが高く、かぜを侮る医師もいる。しかし、経験を重ねるほどかぜの難しさと怖さを理解し、かぜ診療には謙虚となるものである。本書を活用し、かぜを軽視しない診療態度とかぜに騙されない診療能力を培っていただければ望外の喜びである。

最後に、日々の診療に追われながら遅々として作業が進まぬ編者を叱咤していただき、大変なお苦勞をおかけした羊土社の神谷敦史様、保坂早苗様に深く感謝致します。そして、ご執筆いただいた先生方にこの場を借りて御礼申し上げます。

2011年12月

すっかり葉の落ちた桜の樹々から日の差し込む医局にて
虎の門病院 分院 内科総合診療科
川畑雅照